

ボルネオ島生まれ
忘れられない捕虜収容所での生活

やました まさみ
山下 政見 さん (73歳)



昭和17年にボルネオ島モステンで生まれまし
た。わが家は麻栽培の植民事業で、昭和13年に熊
本県からボルネオへ移住。日本から入植した73世
帯が、それぞれ与えられた10畝のジャングルを開
墾して農業を営んでいました。集落には病院やお寺、相撲場もありました。
物心ついた頃には戦闘も激しくなり、定期便のようにアメリカ機が攻撃を
仕掛けてきました。そのたびにジャングルへ逃げ込み、防空壕でじっと息を
潜め、死におびえる日々でした。終戦間近には日本人は捕虜収容所に入れら
れました。有刺鉄線に囲まれ、家族であっても住まいは男女別。生活は厳しく、
生後間もない弟はマラリアに罹って亡くなりました。昭和21年の引き揚
げの時、父はその遺骨の一部をそっと持ち帰ってきたようです。

人に追われたり、帰国の船で海の底に引っぱられるように感じた幼い頃の
恐ろしい体験は、今も決して忘れることができません。あの大戦で生き残っ
た者として、戦争は絶対に二度としてはならないと発信していく義務がある
と思います。
(大阪市平野区・浄覚寺門徒)

お寺で学童疎開を受け入れ
家族が引き裂かれた時代

ひがしもり なるみ
東森 成美 さん (92歳)



昭和18年に結婚しましたが、夫（善城
さん、当時住職）はほどなく召集され出
征。病気で伏せていた義父の介護をしな
がら、大阪から疎開してきた親戚家族との共同生活が始まりました。昭和20
年4月には大阪から東小橋国民学校1、2年生の学童疎開を受け入れ、8月
の終戦まで児童37人がお寺で暮らしました。

とにかく毎日の食事が大変でした。仮設の小屋にかまどを作り、ご近所か
ら野菜などを分けてもらって、何人かで準備し子どもたちに食べさせたこと
が忘れられません。近くに住む当時小学5年だった野田勝昭さん（同寺門徒
総代、写真左）も、大阪の子どもたちと遊んだことより、食糧増産で小学校
の運動場でサツマイモやマメを作っていたことをよく覚えているそうです。

戦況が悪化し、どこにいても空襲におびえるような日々でした。今でも目
に焼き付いているのは、子どもを心配するあまり面会日を待ちきれず、お寺
の門前に立っていたお母さんの姿。家族が引き裂かれるのはどんなに心細く、
つらかったことか。
(奈良県宇陀市・正定寺前々坊守)

大空襲の後の惨状が平和への原点
釈尊の言葉に依って

いしかわ きんや
石川 欣也 さん (86歳)



かつて軍国少年だった私。日本が勝つことを信
じて疑わなかった。そして17歳の私の命題は「い
かに生きるか」ではなく、「いかに死ぬか」でした。
そんな中、昭和20年3月に私が住んでいた大阪
で大空襲がありました。翌朝、学徒動員で勤務していた鉄工所へ行こうと降
りた天王寺駅で立ち尽くしました。たくさんの遺体が道端に横たわり、まだ
くすぶっていたり、灰のようになった遺体もありました。母親が幼子を抱え
て防火水槽に頭から逃げ込んだまま亡くなっている姿も。はじめは足がすく
みましたが、いくつもの遺体を見るうちに不感症になっていきました。

あの惨状が私の非戦平和の原点。2歳になるひ孫がいますが、この子が大
人になる頃、日本はどうなっているのでしょうか。私たちがなめてきたあの苦
しみ、悲しみ、悲惨な思いを二度と味わってほしくありません。仏教徒である
私たちは「己が身にひきくらべて殺してはならぬ、殺させてはならぬ」と
いう絶対の平和主義を釈尊の時代から受け継いでいます。断じて戦の場に立
つことは許されません。
(奈良県大和郡山市・善正寺前住職)

同級生が壁になり助かった私
8月6日のことは忘れない

もりもと のりお
森本 範雄 さん (87歳)



広島原爆で被爆したのは17歳の時。爆心地か
ら1.1kmの場所でした。小学校の代用教員をし
ていましたが、その朝はたまたま電車で病院へと
向かっていました。爆心地の方へです。そして、
駐車場で偶然同級生と出会い、立ち話をしていた時でした。

彼と向き合ったその瞬間、鋭い光が真正面から飛び込んできました。とっ
さに目と耳を手で覆い地面に伏せたのだと思います。繰り返し訓練してきた
動作です。気が付くと、私の手は血の気がなく、皮や身は剥がれて親指と人
差し指の間に粘土のように固まり、右の耳の下には小さなこぶのようなもの
がぶら下がっていました。彼はその場所で死んでいました。私と原爆との間
に立っていた彼が壁のようになってくれたため、私は助かったのです。

8月6日のことは生涯忘れません。私は自分の体験を語るだけですが、戦
争の悲惨さ、平和の尊さ、命の有り難さを伝えたい、それだけです。私の体
験談を元に、一人一人が考え、行動してくれたら、平和な時代がくると思
います。
(広島市西区・光隆寺門徒)

自坊は原爆負傷者の収容所に
亡くなった人々の火葬を手伝った

みうら たつみ
三浦 達美 さん (81歳)



長崎に原爆が投下されたのは、昭和20年8月9
日の午前11時2分。私は爆心地から3.6km離れた
自坊で被爆しました。

爆風とともに壁が崩れ、窓ガラスは飛び散り、
庭が一瞬、青白い火の海に包まれたように記憶しています。あわてて裏山に
逃げ込みました。どれだけそうしていたか、山から下りてくると、お寺は全
身に火傷を負った人や血だらけになった人が大勢運び込まれ、負傷者の収容
所になっていました。薬も食糧もなく、外傷がないのに放射線の影響で亡く
なっていく人もいました。

ご遺体は、裏山の墓地で火葬されました。棺などなく、木切れを組んだ上
に直接遺体を寝かせ、火をかけました。12歳だった私も木を運ぶ手伝いをし
ました。子どもながらたくさん遺体を見ても「怖い」とか「恐ろしい」と
いう感情も湧かず、感覚がマヒしていたように思います。今思えば恐ろしさ
に身がすくみますが、どうすることもできない状況になれば何でもやってし
まう、これも人間の恐ろしさでしょうか。
(長崎市・大光寺住職)

志願してシンガポールへ
母から手渡されたのは「お名号さん」

いちのせ ひとじ
一ノ瀬 人二 さん (87歳)



生まれ育った長崎県佐世保市は「軍港の町」。
高校を出てすぐに海軍の軍需部に入り、2年後の
昭和19年6月に志願してシンガポールへ渡りまし
た。海軍の入隊試験に落ちた後でしたが、それで
も「なんとかお国の役に立ちたい」という思いで、輸送艦に特別に乗せても
らっての出国でした。当時はそういう教育だったのです。出航の朝、母がお
仏壇からひもの付いた包みを取り出してきて「お名号さんだよ」と首にかけ
てくれました。両親は決して「行くな」とは言いませんでしたが、「生きて
帰れ」という思いが込められていたのだと思います。

終戦後はイギリス海軍の捕虜になり、船の荷役など雑役夫として働きまし
た。幸いひどい目には遭わずにすみました。腕時計をはじめ、手荷物はず
べて取りあげられ、母の「お名号さん」も行方知れず。あれから70年も経っ
て覚えていないことだらけですが、見送りの朝の、「お名号さん」を手渡し
てくれた母と、黙って港までかばんを持ってくれた父の横顔を忘れられませ
ん。
(長崎市・福田寺門徒)

子どもたちに 終戦70年

終戦から70年。当時を知る世代は高齢化し、戦争の記憶は薄
れつつあります。どのような体験をし、どのような時代を生き
たのか。戦争のない世の中へ、戦争を知らない子どもたちへの
メッセージを込め、8人から貴重な証言をいただきました。

生き延びた兵士は帰国を許されず
最前線へ送られ続けた

やまが ひさお
山田 寿男 さん (94歳)



国民皆兵で昭和15年、20歳で入営し、終戦はニ
ューギニアで迎えました。いつもなら空爆してく
る米軍機が、低空飛行しても爆撃をせず、飛び去
っていったことを鮮明に覚えています。

「これが正義だ」「日本のために」と訓話する上官に、「何のための戦争なん
だ」と思っていた私は何度も殴られました。「兵隊は言われた通りに動けば
いい」。反抗すれば殴る、それが軍隊でした。

中国から南方戦線に送られる時、私が乗っていた輸送船は撃沈されました。
海には多くの人の死体…、何とか救護されましたが、そのまま戦地へと送ら
れました。生きのびた兵士は祖国に帰ることが許されず、最前線に送られ続
けるのです。ニューギニアでは無謀な命令に従い、食糧はなく退路を失い密
林の中を追われながら進み続けました。毎日が生きるための食糧探しで、兵
士のほとんどが病死か飢死です。仲間のそうした姿を見続けました。70年経
っても昨日のこのように思い出します。どんな理屈があっても戦争だけは
ありません。あんなみじめなものは二度と…。
(横浜市・宣正寺門徒)

父の温もりを知らない私
残るのはたった1枚の写真

たくぼ のり
田久保 稔 さん (71歳)



私は父の顔を見たことがありません。
抱っこしてもらったことも、どんな声だ
ったかも知りません。

海軍にいた父は、私が生まれた時すでに戦地に派遣されていて、戦死した
のだと聞かされて育ちました。でも、父の人柄や亡くなった経緯を聞いたこ
とはありませんでした。母は兄と私を抱えて祖母の家に身を寄せ、生計を立
てるために働き、佐賀から大阪へ何年も出稼ぎに出ていたからです。

その母も亡くなり、今回初めて伯母に父のことを尋ねました。父は戦艦「武
蔵」に乗船していて、昭和19年7月8日にフィリピン沖へ向かう途中で病死
したそうです。31歳でした。今、私の手元にあるのはたった1枚の写真だけ。
この取材を機に、写真立てから取り出してみました。裏に「昭和13年5月」
と撮影の日付が書かれているのを初めて知りました。水兵服の父は24歳の若
者でした。そして、私はこの歳になって初めて父の筆跡を見たのです。

私のような戦争孤児は多かったと思いますが、私たちだけで十分です。戦
争は二度としてはなりません。
(神奈川県茅ヶ崎市・来恩寺門徒)